

作品研究：ブールデルとアナトール・フランス

著者	高階 秀爾
雑誌名	国立西洋美術館年報
巻	1
ページ	60-61
発行年	1967-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1263/00000650/

作品研究

ブールデルとアナトール・フランス

高階秀爾



アントワース・ブールデル《アナトール・フランスの肖像》
1919年 国立西洋美術館所蔵

アントワース・ブールデル(1861—1929)がアナトール・フランス(1844—1924)にはじめて会ったのは、1911年のことであった。当時ブールデルはその代表作《弓を引くヘラクレス》(1910年のサロンに出品)によってようやく人びとにその名を知られるようになったばかりであったが、アナトール・フランスは、すでにその主要な作品を発表しており、赫々たる名声を享受していた。彼らが知り合うようになったのは、その前年に世を去ったギリシア生まれの詩人ジャン・モレアス(1856—1910)の記念碑を作る委員会に、モレアスと親しかったブールデルが自分の記念碑像模型を提出してからである。アナトール・フランスは、文壇の大御所として、その委員会の委員長をしていたが、ブールデルの模型に感心して、彼に記念碑像の制作を注文することに決めた。ブールデルの模型は、高い墓碑の上にモレアスの胸像を置き、その胸像を半ば覆っている布を墓碑の傍らに立っている女性が引き上げようとしている構成であった。しかしその後、委員会の内部で、モレアスがギリシア人であったことから、ギリシアの彫刻家ディミトリアデスを推す動きができて、結局パリに建てる記念像はディミトリアデスに依頼するが、その交換条件として、ブールデルにはアテネの町に記念像を建てて貰うということで話がついた。しかし、結局ギリシアは彼に注文を出さず、ブールデルの模型は遂に模型のままで終ってしまった。その後、1919年になって、ブールデルはフランスに対し、胸像を作らせてほしいと申し出た。ちょうどその頃、アナトール・フランスはブールデルの義兄にあたるクーシュ博士 *Dr. Couchoud* の病院に住んでいたため、ブールデルとしても話がし易かったのであろう。アナトール・フランスも

ブールデルの才能を高く評価していたので、喜んでその申し出に応じた。

ブールデルは、クーシュ博士の病院で早速仕事にとりかかることとなった。フランスは、毎朝起きるとすぐに、自慢の髯を丁寧になでつけてから部屋着のままポーズしにやって来るのだった。ところがある朝、時間がなくて、フランスは髯の手入れをしないままポーズにやって来た。彼の髯は寝ているあいだに、すっかり左の方に寄ってしまっていた。これを見たブールデルは、その方が表現効果があって面白いから、今後ずっとそのままポーズしてくれと頼んだ。その結果出来上った胸像でも、髯は左右均等ではなく、ずっと左の方に偏って表現されることとなった。

また、この胸像は、珍しいことに上半身に何の衣裳もなく、裸のまま表現されているが、それも、ブールデルの望みであったという。この胸像が発表された時、有名なビガル作のヴォルテールの裸像に倣って、アナトール・フランスが自分をヴォルテールになぞらえて裸像を作らせたのだという噂が流れたが、実はブールデルが「アナトール・フランスの裸体は彼の文体と同じように典雅」だと思ったので、彼の方から懇望して裸像にしたのだという。この作品の原型が出来上った時、アナトール・フランスはその出来栄にすっかり満足して、自から“Anatole France”と自分の名前を彫り込んだと伝えられる。それに続けて、ブールデルが Antoine Bourdelle 1919 と彫り込んだ。

もともとアナトール・フランスは、美術作品に対しては、プラディエやフラゴナールなど、どちらかと言えば18世紀のロココ風の趣味の持主でありブールデルの作風には全面的に賛成ではなかった

が、しかし、彼が特異な力を持った天才であったことは認めていた。次ぎのアナトール・フランスの一節は、ブールデルに対する彼の傾倒ぶりをよく示している。

「ブールデルは、われわれの時代の最も偉大な彫刻家である。最も偉大で、最も高貴で最も力強い彫刻家だ。芸術の歴史においてこれまで彼以上に豊饒で、彼以上に力に満ちた天才がかつてあっただろうか。私は彼の中にただひとつの欠点しか認めない。それは彼が時に可能なこと以上のものを望むことだ。だがそれは高貴な欠点と言うべきであらう」。

ブールデルの方も、むしろこの文壇の大家を深く尊敬していた。ある日、アナトール・フランスがブールデルの作品は確信に満ちていると褒めた時ブールデルは、「自分の作品を見れば誤りに満ちているという確信しか持てません」と答えた。その時アナトール・フランスは自分の著作を一部取り出してブールデルに示した。当時フランスは名声の絶頂にあったが、その本には、フランス自身の手でほとんど毎頁、書き込みや訂正がしてあった。そしてフランスは、静かに「自分に満足できる者は愚か者だけだ」と言ったという。

参考文献：

Michel Dufet “Deux amis: Anatole France et Bourdelle” *Bulletin du Musée Ingres*, No. 12, 1962. pp. 3—4.